

創造



No.
47

創造 No. 47

●エッセイ……………	3
河崎善一郎 氏（大阪大学大学院工学研究科教授）	
●第12回「立山倶楽部」会議……………	4
●アイデア・ロボット・フェスタ……………	6
●高校生とことん科学セミナー……………	8
●郷土先賢室 顕彰者紹介……………	9
富山県ひとづくり研究会発足	
●平成19年度 財団事業概要……………	10
●我が社の人づくり……………	11
JFEホールディングス㈱ 代表取締役社長 数土 文夫 氏 平成19年度 富山県教育記念館展示スケジュール 賛助会員の募集	

【表紙コンセプト】

創造は無限に広がる宇宙であることを表しました。星の数だけ人の考えがあり、星の輝きが人の創造の数を表しています。

スーパーマーケットの棚から納豆が消えたと思ったら、一週間ちよつとで戻ってきた。納豆の消えたきつかけは、TVで人気の高い「科学番組」で、納豆にダイエット効果のあることが紹介されたからだそうである。それが、「二週間で戻ってきたのは、その番組制作のための実験で、捏造のあったことが発覚したからだそうである。筆者は皮肉屋で、

「なんとも我が同胞の、熱し易く醒め易いこと」

と、一人冷ややかにこの騒動を觀察していたのだけれど、「一人の時も七十五日」というから、

「おやまあ、そなたはなやなああつたつて」と、忘れていくというより、すっかり記憶の外になっている読者も多かろう。

実はあの納豆騒動とその後のスキヤンダルは、今年の一月から二月にかけての事件で、その人気番組の突然の中止に始まって、放送局社長の辞任まで及ぶ大事件となったのである。その後この事件は、番組を制作するにあたっての「無理難題」の問題にまで議論が及んだり、「科学、似非科学」の問題にまで発展して社会現象となり、自然科学を生業とする小生自身色々考えさせられた次第である。

この種の「科学番組」が、必要以上に人気の高いのは、例えばメタボリックシンドロームなんぞという、舌をかみそうな医学用語が一般に知られるところとなるなど、世を挙げての健康ブームであることも、一役買っているに違いない。それを逆手にとって、データを改竄してま

納豆騒動を考える

大阪大学大学院工学研究科
教授 河崎 善一郎 氏



つても否定されるべきには違いない。とはいえ、筆者自身の心のどこかに

「たかがテレビ番組ではないか」

との醒めた見方のある事も否定できない。健康ブームの二因に加え、近年の若者

の理系離れをどうにかせねばとの世論も

一因となって、新聞やTV放送で「科学

ネタ」の取り上げられることが多い。若

者の理系離れは、科学が生活と縁遠いもの

のようになってしまったからとの反省もあり

行政まで巻き込んで「科学をもっと身

近なものに」という大きなうねりとな

っている。だからこそいえる大要諦か

事件、依然として筆者には

「たかがテレビ番組ではないか」

の気持ちがある。そしてこの言葉の背後

に、

「バラエティー番組で本当の科学がで

る筈がない」

という、自然科学者としての自負心が窺

いているというのが正直なところかもし

れない。このように書くと、非常に思い

上がった態度と、誤解を受けそうで、

「科学を日常生活に、身近なものに」

とのうねりに逆行する反動的科学者のレ

ッテルを貼られてしまうかもしれない。

誤解しないで戴きたいのだが、筆者は

決して思い上がった態度で、科学者とし

ての特権を振りかざしているのではない。

上手くはいえないが、科学といえども

アマとプロの間に大きな差があると信じ

ているのである。だからとて、一般の方々

にも判ってもらおうとする我々の努力は

界中に衝撃を走らせたES細胞ブータ捏

造事件の場合と、今回の放送局のそれら

は本質的に違う。それが証拠に、東京清

谷区の電話ボックスに雷が取り付いたと

か、UFOの撮影に成功した、とかいつ

た番組は、決して社会現象化はしない

ではないか。というのも、これらの場合に

は、番組を見る側がはなつから「科学こ

っこ」と判っているからであらう。番組

を制作していた放送局には失礼だが、「似

非科学」とはいわれないまでも、最初から

「厨怪物」の可能性もあるバラエティー

番組に日本国中が踊らされてしまったこ

とが、今回の悲劇なんだろうと思う。そ

して踊らされてしまった一番の理由が、

たまたま主題が「健康ブーム」に直接か

かわっていたからではなからうかという

のが筆者の理解で、決して放送局の弁護

のために申し上げる心算はないが、

「たかがTVバラエティー番組。管轄省

庁をあげての問題にするほどのことは無

からう」

と、冷やかに揶揄しておきたい。

プロフィール

河崎 善一郎（かわさきせんいちろう）

昭和二十四年大阪府生まれ。大阪大学大

学工学研究科通信工学専攻博士課程修了。名

古屋大学の電機研究所助手、スウェーデン・ウ

プサラ大学気象研究所客員講師、大阪大学工

学部講師、同助教授を経て、平成十二年から

現職。「雷の不審談」を追い求め、地上観測や

衛星観測を美し、世界中を飛び回っている。

平成三年、日本大気電気学会学術賞、平成

十年、電気学会進歩賞、レーザ学会進歩賞を

開催
テーマ

元気な高齢社会のために

国際的に活躍しておられる方々から、未来への洞察、世界の潮流、人間のあり方などについて、自由かつ率直な意見を交換していただくための交流の場として、平成6年度から「立山倶楽部」会議を開催しています。

今回は、いわゆる「団塊の世代」の大量退職を迎える今、これからの高齢者の生き方について、また高齢者の経験や技能を新たな地域づくりにどう活用するかについて、意見交換を行いました。

話題提供



奥野達夫氏
NPO法人クリ
ンツーリズム
とやま理事長

福光美術館の庭を掃除してくれる南砺市シルバー人材センター会員の方、榎方志功記念館「愛染苑」のスタッフ、「春の色食堂」の主人、「しらくらの学校」の代表の元校長先生など、日頃から富山の元気なお年寄りと現場で接している。

米騒動を11歳のときに体験し、98歳までそれを語り継ぐことを生きがいにしてきたが、亡くなってしまった浜多きくさん、小矢部川上流域に今も住み元気に山仕事をしている嵐龍夫さんといった方々は、いわば歴史を語り伝える最後の人。

素樸らしい知恵を持ち、伝承している70〜80代の方々の記憶がどんどん消えており、次の世代にバトンタッチするような世代間交流を仕掛けていかないとけない。団塊の世代は、都市と農山漁村との交流や世代間交流のコーディネーター役に本気で取り組む必要がある。

出席者の意見



石川純子氏
ノンフィクション作家

おばあさんたち、姥の聞き書きをやってきた中で、元気な高齢者のモデルにな

る方を「まつを編 百歳を生きる力」という本にまとめた。バウフルな90歳代を生きたら姥の根底にあったのは、亡くなった夫の日記を読み、実は自分は愛されてきたのだと分かったことで、そこから生まれてくる希望、そして自立の精神。

高齢者が元気になるためには、聞き書きがいい手立てになる。人生に共感し、尊敬の気持ちでお話を聞かせていただく。お年寄りはほとんど元気になっていくし、お年寄りが持ってきたありがたい知恵を、たくさんいたたけたいことができる。宮城県には、こういうことわざがある。「年寄り一人が亡くなると、文庫蔵が一つ焼けたと同じだ」。聞き書きはいわゆる庶民の歴史も残すことになる。



袖井孝子氏
お茶の水女子大
学名誉教授・書
画教授

シニア社会学会の副会長として、高齢社会の問題に取り組んでいる。この団体の英語名に使っている *ambassadors* という言葉を、年齢を超えてという意味で最初に使ったアメリカの女性作家キャロライン・バードさんは、高齢者こそ社会的に活躍できるのだと言っている。家族を扶養する責任から自由になる、金銭にとらわれる必要がない、社会的な評価から自由になるといった、何かの拘束から逃れる自由だけではなく、本当に自分がやりたかったことができるという自由、公共のために働く自由があり、現役の頃はできなかったことができるようになる。そ

ういう意味で、高齢社会は決して暗くはない。

実際には高齢者はかなり元気だが、世の中は高齢者について間違ったイメージがある。世代間の交流の場を作り、若い人に高齢者の正しいイメージを伝えていくことが重要。



濱口晴彦氏
早稲田大学名誉
教授、創造学園
大学教授

高齢者のたくましさは「自立」と「自律」のバランスを取って選択を続けることにある。それを聞き書きして本にまとめ、それが後世に残っていくということは、世代間の交流の生きた実例。

若者たちとの交流の中で「私たちは薄く区切られた世代内の交流しかない。高齢者が何を考えているのかわからないから、ぜひ交流させてもらいたい」という発言を聞いた。高齢者が、どうすれば若者を世代間交流の中に巻き込めるかという手がかりが必要。

高齢社会は「高齢者の社会」ではない。人間の歴史の中で、社会は必ず老若が共同してやっていた。高齢社会になったから世代間交流が必要なのではなく、高齢社会と呼んでいる社会が持つ問題点の一つが世代間交流であり、「老若共同参画社会基本法」という法律を提案している。



● 意見交換から

(抜粋)

- 65歳以上で配偶者と死別した後の余命は女性のほうが長く、死別して困ったことを挙げるのは男性のほうが多い。社会的・経済的には女性はあまり恵まれていないように見えるが、実際には男性の老後が問題ではないか。
- 団塊の世代の定年の夢を、夫だけではなく夫婦で実現するようにすべき。そのためには夫婦間のコミュニケーションをうまく成り立たせる必要がある。
- 妻は夫を突き放すのではなく、相手の来歴を理解する思いやりが必要。ずっと会社でやってきたのが地元に戻って、どこに何かあるかも分からない男を手助けするよくな猶予期間があってもよく、そんな才覚を持った妻が求められるのでは。
- 小中学校などに、少子高齢化の中で男

は変わっていく必要があるのだというメッセージを織り込んだ体系的な副読本を作って提供し、学んでもらうことが必要ではないか。

- 団塊の世代で困るのは、情報に詳しいこと、勉強していないこと、自分に投資していないこと。定年になってO日会などに集まっても、ゴルフや囲碁、趣味の世界の自慢話、あとは孫の話で会話が続き、誰も相手にしてくれなくなる。自分の役割をしっかりと見つめないと、田舎暮らしにしてもバラ色にはならない。農業もそれ相応の準備がないと難しい。
- 男が変わる手がかりの一つとして「シニア・スタート」というプログラムを提案している。シニアが退職する際、その企業から財政支援をもらい、帰ってくる地元の自治体が会場や支援システムを提供、シニア社会学会のような団体がノウハウを提案するという構想。
- 団塊の世代の男性は企業戦士としてやってきたので、親孝行をしてこなかったし、子育てにも協力していなかった。その後ろめたさで、団塊の世代は親孝行と子どもの教育を本気でやったらいいのではないか。
- 南砺市の保育園から、棟方志功作の「蘭着川」という物語を紙芝居にして子どもたちに伝えたいという発案があり、実際に少女時代をそこで過ごした棟方志功の次女の小泉ちよあさんに絵を描いてもらった。地元で実演すると、子どもたち以上に涙を流して喜んだのは高齢者で、期せずして世代間交流になった。さらに、ちよあさん自身がこの1、2年ですっかり元気になった。これは50代ぐらいの保育士さんたちの応援でできたことで

あり、50、60代の人たちには、そういう役割があってもいいのではないか。

- 聞き書きの本を出版すると、その集落の人たちがみんな買って読んでくれた。三世代同居のまん中の世代にもものすごく喜ばれ、同じように苦労した自分のおしゅうとめさんを見直すようになった。身近なおばあちゃんなどを聞き書きした本は、普段本を買って読むことがあまりない人たちも読んでくれる。



- 民俗資料館などは、年配の人のことも分り、子どもたちや若い人たちのことも分かる50、60代のベテランのフロアがきちんと面倒を見れば、生きた施設になる。市町村合併に伴って、今後そういう人材が一層必要になってくる。
- 高齢者は、若者に手を差し伸べるだけではなく、あえて壁になり、考えるきっかけを作ることも必要。壁になりながら、同時に相手の持つ潜在的な能力を発見し、

それを引き出す手助けをするのが年上の者の責任ではないか。

- 世代間交流の一つの手がかりとして、自分がかような人になりたいと思うような人、メンター(師表)に関する作文を募集すれば、いいメンターのメッセージを発信し、伝えることができるのではないか。
- 最近富山県でもNPO、特に市町村合併で人間関係が希薄になるという危機感から、地域ごとの小さな単位のNPOが増えてきている。仕事での人間関係とは性質が違う、目標が同じで、しかも自分の生活のためではないという人間関係が気持ちいい。こういうNPOをもうちょっと応援してもいいのではないか。
- 新聞の投書欄をもっと活用すべき。新聞の紙面をきちんと整理してフォロワーするのは大変だが、そのことが大きな社会の動きを整理することになる。投書の中には、庶民からの具体的な提案がたくさんある。それを系統的に整理すると、いろいろの手がかりが見えるのではないか。



「立山倶楽部」会議に第1回から代表世話人としてご尽力いただきました。東京大学名誉教授の木村尚三郎先生が、奇しくもこの第12回会議が開催された平成18年10月17日に逝去されました。先生は今回の会議にもご出席の予定で、会議の10日前にも病床からお電話をいただくなど、「立山倶楽部」を最期まで気にかけていただきました。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

◆ 開会式、講演会、ロボットづくりセミナー



▲講演「ロボット創り喜びこもこも」



▲ロボットのデモンストレーション

会場のカルチャーホールは高校生・高専生そして教職員でほぼ満員。開会式は、ひとづくり財団・八木副理事長のあいさつで始まり、次に工業高校生・高専生による自作のロボットをつかったのデモンストレーションがあり、そして、癒しロボット「パロ」の開発者である柴田崇徳氏の「ロボット創り喜びこもこも」と題しての講演がありました。

午後からは、同じ会場でのロボットづくりセミナー。前半は、富山県立大学・神谷和秀先生による「ダヴィンチのアイデア」、後半は、富山商船高専・浦風和裕先生による「ロボットづくりの体験から」と題してのセミナーがありました。

ロボット・フェスタ

ロボット展&チャレンジデー

ロボット展を!

あけるロボット競技大会は16回
かな創造力を培う面でも著し
県を発祥とする高校ロボット
入るようになり、各種大会におけ
のがあります。また、高等専門
るものがあり、全国にその名を
からは中学校でもロボットコン
を高めています。

を紹介することにより、児童生徒
力や高い技術水準を知っても
の夢や希望、富山県に学ぶことに
。

を開催しましたが、ロボット展
ットに触れてみたい」「ロボッ
が多くあり、今回はロボットの
できる多彩な内容のロボット展、

◆ ロボットづくり教室(半日コース)

富山県教育記念館5階大会議室では、参加申し込みのあった21名(小学5、6年生)が「ワンセンサーライントレーサー」作りに挑戦。ロボットづくりに必要な材料や道具は、魚津工業高校の橋本行史先生に用意していただきました。難しい製作過程では、魚津工業高生が丁寧にその指導にあたっていました。完成させ、黒いライン上を動く自作のトレーサーに参加者は満足そうでした。

付き添いの保護者、見学者等で賑やかなロボットづくり教室でした。



◆ デモンストレーション「レゴマインドストーム」

ロボットづくり教室(半日コース)と並行して5階小会議室では、富山工業高専の佐藤圭祐先生と学生による「レゴマインドストーム」を使っでのデモンストレーションがありました。参加した小学生・中学生は、いかに強力なロボットにできるかを工夫し、自分のアイデアで組み立て、対戦相手を見つけてはロボット相撲を楽しんでいました。



◆ ロボットづくり教室(1日コース)



チャレンジデー2日目(1月14日)には、椅子(階段)を取り払った広いカルチャーホールを会場として、参加申し込みをした14名の中学生が富山商船高専の浦風和裕先生と学生の指導のもと、「ロボカーの製作」に挑戦しました。10時から16時までの1日コースでしたが、光センサーで黒いラインを検出して、自動追跡して走るロボットカー作りに熱中していました。

ロボット展

とき 平成18年12月16日(土)～平成19年1月28日(日)
ところ 富山県教育記念館1階多目的ギャラリー

ロボットフェスタの趣旨の1つに「小・中学生がロボットに直接触れたり、自ら製作してみたりすることによって、物づくりのおもしろさや楽しさを味わうとともに、進路選択の一助とする」があります。その意味で、ロボットの展示期間を長期のものにしました。

教育記念館1階に36体のロボットを運び入れるのはたいへんな作業でしたが、先生方や生徒・学生のみなさんのおかげで、アイデア・ロボット・フェ

スタは成功裡に終わりました。

展示ロボットのデモンストレーションも、生徒・学生のみなさんの休日を返上した協力で好評のうちに終わることができました。

【出展ロボット一覧】

出展学校名	ロボットの愛称
砺波・庄西中学校	Refrain
氷見・南部中学校	なんちゃって boys
氷見・十三中学校	ヴィジュアルディ
南砺・福野中学校	SRANK シカケニン Freedom
富山・八尾中学校	ニュートンず
魚津工業高校	機伝「玲瓏」 機伝「玉」 機伝「詠」
富山工業高校	TANI × 2 SPIRAL 風雲児
大沢野工業高校	シルバーブリット 鉄男 プリキンガー 麒麟児
高岡工業高校	天翔射撃(フライングショット) 剛闘 MK-III
二上工業高校	乱チャふたがみ 大波撃ふたがみ 根性ふたがみ
砺波工業高校	ヤッピー 虫ロボット フレッシュ ZZ
不二越工業高校	ダブルアーム Z ダブルアーム おそうじロボット「そうちゃん」 コミュニケーションロボット「コムキョウ丸」 キーボード演奏ロボット「キーちゃん」
富山商船高等専門学校	FireWall NED-Gravity (自動) NED-Gravity (手動)
富山工業高等専門学校	K.M.K 先用後利 富業運輸



▲正面玄関側からの会場
▼東入り口側からの会場



▲▼展示ロボットを使っているデモンストレーション



アイデア・ロ

中学生・高校生・高専生に

チャレンジでき

全国に先駆けて県内高等学校目を迎え、技術の進歩はもとよみ成果が認められます。特に、コンテストは今や全国規模で行われる県内高校の活躍にはめざましい学校の技術力、創造力にも目を馳せています。加えて、一昨年度テストが行われ、年々その技術

このようなロボット研究の現や広く県民のみなさんに日ごろらうとともに、児童生徒への対する誇りを育みたいと考えま
昨年度は、第1回目のロボット示が主となり、来館者からは「トが動くのを見たい」といったおもしろさや楽しさにチャレンジロボットフェスタとしました。

ロボット展への来館者、アンケートより

- ・ たくさんのロボットが置いてあり夢をふくらませてくれました。
- ・ アイデアが素晴らしい、高校生とは思えないほどのロボットの製作に驚きました。今後ますますの技術の向上にお楽しみ下さい。
- ・ 私は中学校ですが、高校・高専のロボットを間近に見てとても面白く参考になりました。

- ・ ロボコンはテレビで見ている、どこかとてもすごい人達が作るものなのかなと思っていましたが、同じ富山県の高校生の人達が素晴らしい工夫で作っていてびっくりしました。もっといろいろな所で発表して、みんなにも知ってもらいたいと思いました。名前の付け方がみんなカッコイイので見ている方もワクワクしました。

高校生ととことん科学セミナー

県内高校生が科学への関心をさらに深め、将来の進路や人生について考えるきっかけとすることをねらいとして、高校生ととことん科学セミナーを開催しました。今年も、小矢部市生まれの知能ロボット研究者である稲葉雅幸教授と、東京大学情報システム工学研究室のみなさんを講師に迎え、高校1・2年生の希望者21名が参加して行われました。

●テーマ 「ロボット最前線 -ロボットを知り、動かそう!-」

●期日 平成18年12月16日(土)・17日(日) 1泊2日

●会場 雁インテック大山研修センター

●講師 東京大学 情報システム工学研究室

教授 稲葉 雅幸氏

特任講師 岡田 慧氏

博士課程2年 小倉 崇さん、神崎 秀さん

博士課程1年 林 摩梨花さん(魚津高校出身)

修士課程1年 石坂 唯さん、小島 光晴さん、得津 寛さん

学部4年 横 俊明さん(高岡高校出身)、森 優人さん



1日目 11:00~ 講演とロボット紹介

稲葉先生から「知能ロボットの進化と発展」と題してご講演をいただきました。つづいて、稲葉研究室のみなさんの自己紹介を兼ねて、それぞれが研究しているロボットを紹介していただきました。



〈生徒の感想から〉

- ・ロボットの進化についての話を聞き、40年間のロボットの歴史を見て、すごい発展だと思った。それに、人間がとても簡単にできる行動をロボットがするには、長い時間の研究が必要だという、ロボットづくりの大変さもわかった。
- ・“プロメテ”がとても印象に残った。手を引けばしっかりついてきてくれたことに感動した。動きはまだ堅いし、バランスを保つのが難しそうだったけれど、どんだん人の動きに近づいていると実感した。



13:00~ ロボット製作・プログラミング実習

レゴマインドストーム NXT を使って、ロボットの製作とプログラミングを行いました。基本的なプログラムとデータ転送の方法などを学んだ後、センサーやモーターを駆使し、ラインをトレースして走るロボットの製作に取り組みました。

〈生徒の感想から〉

- ・レゴでここまでロボットの製作ができることに驚きました。プログラミングも難しい作業が必要だと思っていましたが、簡単にでき、自分なりの調整もできて楽しかったです。
- ・プログラミングは、とても複雑そうで、大変そうだと思っていましたが、私のような人向けのソフトがあり、簡単にすることができたので嬉しかったです。実際にプログラミングした命令が行われるところを見ると、とても楽しくなりました。



20:00~ とことんセミナー

研究室の方々から「ゲームとロボットの関係」や、高校生活や大学生活について、ユーモアを交えて話していただき



ました。また、高校生が稲葉先生からの質問に答えて、将来の夢や印象に残っているロボットについて発表しました。

終了後も、稲葉先生に質問する生徒や、ロボット作りの続きに取り組む生徒など、それぞれに遅くまで熱心に取り組みました。

〈生徒の感想から〉

- ・大学の先輩方の話が聞けて、自分の今・将来の参考になりました。ゲームも勉強に利用することもできる、またそのゲームには物理法則や数式も使われていることもわかりました。
- ・先輩方のお話がとても参考になりました。大学生は予想以上に楽しそうなので、早く大学生になりたいと思いました。

2日目 9:00~ プロジェクト制作・発表会

前日に続き、グループごとにロボット作りに取り組みました。発表会では、ロボットの特徴とプログラムのプレゼンテーションを行い、実際にロボットを走らせました。ユニークなデザインや動き、ライトレースの速さや正確さ、緻密なプログラムなど、研究室の方々からも驚きの声が上がっていました。最後に、研究室のみなさんから優秀チームへ賞状が、また全員に修了証と参加賞、2日間の様子のビデオと写真を編集したCD-Rが贈られました。



〈生徒の感想から〉

- ・この時間が、セミナーの中で一番楽しかったです。ライトレースでコースを2周するために、プログラミングをするのがとても大変でした。でもちゃんと走れるようになったときは、とてもうれしかったです。
- ・みんなとても個性的なロボットを作りあげていてとても面白かったです。プレゼンがうまくできなかったけれど、プログラミングで「ベストハッカー賞」をもらうことができてとてもうれしかったです。



第16回郷土先賢室顕彰者紹介

富山県教育記念館3階には「郷土先賢室」があります。郷土が生んだ先賢者を顕彰するための展示室です。

このための研究には9名の専門員（公立小・中学校の教員）が当たり、顕彰者の選定、調査、資料の収集、解説文の作成、展示の工夫などの作業を行っています。単に文献記録だけ紹介するのではなく、顕彰者の生家や子孫の方の家にまで足を運んで貴重な資料をお借りしたり、関連の地域で調査や取材に当たり、顕彰展を開催しています。今までに104名の方の顕彰展を行ってきています。



西側展示コーナー



東側展示コーナー

◎教職に就きながら、県洋画界の振興に寄与した画家

川辺 外治 明治34年～昭和58年(1901～1983)

師範を終えて福野小学校に奉職し、教職のかたわら好きな画の勉強を続けました。その後、東京府専科園遊教員試験に合格。4年間の研鑽を終えて帰郷し、県立砺波高等女学校に転任した。以後、美術教育者として、また自らも洋画家として本格的な創作活動を展開した。戦後、県下美術界の再生に努め、昭和33年に県内の美術家を結集して「彫彫会」を結成した。

◎縫製技術の近代化を確立した人

安部 清 明治35年～平成9年(1902～1997)

尋常小学校卒業後上京し、子供服製造「緒方商店」に入社。3年間で番頭になった。その後、婦人服の技術を身に付け、昭和24年に株式会社「ベビー」を設立。昭和30年から全国統一の婦人子供服製標準規格寸法の制定に取り組んだ。生涯にわたり子供服の製造技術に貢献する一方、企業活動で得た利益を社会に還元し続けた。

◎保育事業の先駆者

堀田 くに 明治31年～昭和60年(1888～1985)

同船問屋の四女として生まれた。高等女学校卒業後、英志看護婦として務めた後、同船問屋を切り盛りし、その行動力から伏木町婦人会長に推された。伏木港付近に一日中置き去りにされている子供たちに心を痛め、尼寺を借りて無料で子供を預かり始めた。県内で初めての託児所であった。昭和60年まで伏木保育園園長を務め、働く女性とその子供たちのために生涯をささげた。

◎「善の循環」という経営哲学に基づき、世界的企業を創り上げた実業家

吉田 忠雄 明治41年～平成5年(1903～1993)

高等小学校を卒業後、兄の店で働く。20才の時、貿易商を志して上京。就職先がファスナーの輸入販売を始めたのがファスナーの出合いとなった。その後独立し、ファスナー部品の加工、販売で得た利益を消費者、関連企業、会社で分配し互いに繁栄する「成果三分配」を実践し、事業を拡大する。会社経営の原点を「善の循環」という言葉で表現し、世界のYKKを育て上げた。

◎「民謡おわら」を芸術の域まで高め、今につないだ人

川崎 順二 明治31年～昭和46年(1898～1971)

金沢医学専門学校を卒業し、自宅で開業。大正13年に「民謡おわら研究会」が設立され、その理事長に推薦されたのが「おわら」との出会いとなった。その後、会衆となり、男子舞、女子舞を創作するなど、40年以上にわたっておわらの発展に尽くした。今日の魅力ある「民謡おわら」を創り上げた大恩人である。

◎女の人生を描き続けた女流作家

小寺 菊子 明治17年～昭和31年(1884～1956)

17歳のときに上京。東京高等工業学校のタイピストとして就職。働きながら文学の道に進んだ。郷土作家の紹介で徳田秋声の門に入り、本格的に小説の勉強に取り組んだ。明治44年「父の罪」が懸賞募集小説に当選し、女流作家としての地位を確立させた。その後も作品を発表しその作品は自分の立場を題材としながら深く人間の心を見つめ、人生をしみじみと考えさせるものであった。

「富山県ひとづくり研究会」発足

財団では、先人の英知を次代に引き継ぎ、創造性豊かなひとづくりに関する事業を調査研究するため、今年度新たに「富山県ひとづくり研究会」を設置しました。

第1回目の研究会は、3月19日㈫に江戸しくさの語り部として著名な越川禧子氏（㈱インテリジェンス・サービス取締役社主）を講師にお招きし、高志会館で開催しました。越川先生は「イキで素敵な江戸しくさ」をテーマに、江戸しくさにはコミュニケーションを円滑にするヒントや生きる知恵がちりばめられていると話され、参加者は活発に意見を交わっていました。

研究会参加団体

富山県小学校教育研究会
富山県中学校教育研究会
富山県高等学校教育研究会
社富山県教育会
財富山県教育公務員弘済会
富山県PTA連合会
富山県私立幼稚園協会
富山県民間保育連盟
富山県私立中学高等学校協会
社富山県専修学校各種学校連合会

富山県ひとづくり財団の事業概要

平成19年度事業計画

1 人づくりに関する調査研究 及び普及啓発事業

①「とやまファン倶楽部」

富山県をこよなく愛し、全国から富山県を応援している方々のヒューマンネットワークづくりを推進します。

ア 会員交流会開催

イ 「赤坂サロン」開催 新設

②「富山県の学校給食90年のあゆみ」調査研究 新設

大正3年の冬期温汁給食から始まった富山県の学校給食のあゆみと今後のあり方を調査研究します。

③富山県ひとづくり研究会

先人の英知を次代に引き継ぎ、創造性豊かなひとづくりに関する事業を調査研究します。

④その他

とやま賞受賞者及び地域づくりや生涯学習等に関わる人材等のデータベース整備を行います。

2 元気で創造性豊かな 子どもの育成事業

①「夢の卵」育成

大きな夢に向かって努力し、世界の発展に貢献できる子どもたちを育成するため、小学校高学年及び中学生を対象に「夢の卵（将来の夢）」を公募し、優秀者は各分野の第一人者のもとへ派遣します。

②きらめき未来塾

子どもたちの発想力や創造力、ユーモアのセンスなど多様な可能性を引き出すため、各分野の第一人者を講師に招いて4つの道場を開催します。

ア 右脳活用道場

詩作りを通して異能開発を促進し、「柔軟な発想力」「創造力」を育成する。

イ 思考道場

ゲーム感覚で数的考え方を発展させ、「自分で考える力」「柔らかな思考力」を育成する。

ウ 日本語道場 新設

朗読を通して日本語の豊かな表現を理解し、自己表現力や話術を身につける。

エ お笑い道場

落語を学ぶことによって話術やユーモアのセンスを身につけ、ウィットに富む自己表現力を高める。

③高校生とことん科学セミナー開催

数理科学の分野で世界的に活躍する人材を育成するため、各専門分野の第一線で活躍されている科学者・数学者を招いて、高校生を対象に最先端の研究に関する講義とひざを交えた交流会を行います。

④「アイデア・ロボット・フェスタ」開催

子どもたちが、ロボットづくりや操作の楽しさを体験することで、ものづくりの大切さを学びます。

3 元気な地域づくり事業

①「学ぼう！ふるさと未来」支援

小学生の「ふるさとに学び、ふるさととともに生きる」地域活動を支援します。

②「水みらいプロジェクト」支援

小中学生の「水環境（水との共生）」に関する調査研究活動を支援します。

③「富山県をよくする会」支援 新設

地域やPTAなどと一緒にボランティア活動や挨拶運動などに熱心に取り組んでいる、県内中学校の生徒会やグループを顕彰し、一層の活動を奨励します。

4 優れた人材育成支援事業

学術研究、発明発見、芸術文化、スポーツ等の分野において優れた業績をあげた個人または団体の活動を奨励するため「とやま賞」を贈呈するとともに、子どもたちに科学の世界への夢を広げてもらうための講演会を開催します。

5 教育の歴史文化に関する 文献の収集・保管・展示

①特別展及び恒例展の開催

⇒平成19年度のスケジュールは11ページをご覧ください。

②教育資料収集

富山の教育の歴史や文化に関する文献や資料の収集及び整理を行い、各種教育展示等で利用します。

③富山県教育記念館の管理運営

学校教育関係団体が集う富山県教育の拠点としての機能を生かし、明るく利用しやすい管理運営に努めます。

我が社の人づくり

第4回

～このコーナーでは、毎回、当財団の法人賛助会員の皆さんに、企業の人づくりについて語っていただいております～



JFE ホールディングス株式会社
代表取締役社長 数土 文夫 氏

昨今の激変するグローバル経済の中で、「人づくり」は企業の浮沈に関わる極めて重要なテーマです。

JFEは「常に世界最高の技術をもって社会に貢献する」ことを企業理念に掲げておりますが、製造業にとっては技術力の創造と伝承こそが競争力の源泉であり、それに資する優秀な人材をどう確保し、どう育てるのが経営上の要諦であるといっても過言ではありません。

そこで、当グループでは下記のような諸施策を積極的に展開しています。

まず、採用施策はより柔軟なものに変えてきています。

従来、製鉄所のオペレーターやメンテナンスを担当している現業系の社員は、工業高校等からの定期採用が主でしたが、現在では中途採用を積極的に実施し、実力と意欲がある方を幅広く採用することにしました。

その結果、2003年のJFEスチール発足以来採用した1200名以上の現業系社員の内、約1/4以上を中途採用者が占めています。

また、その育成にあたっては、60歳の定年を迎えた社員を積極的に再雇用し、ベテランの持つ素晴らしい技能だけ

でなく、変化や難題に創造的に対応するマインドもあわせて若手社員に伝承してもらう等の新たな取り組みを行っています。

更に、現有勢力の底上げの観点から、社員一人ひとりが自分の仕事の棚卸を行ない、職場全体で議論し仕事のやり方の「いいとこどり」をすることによって、過去の延長線上ではない新たな発想で課題にチャレンジできるような工夫をしています。

我々のビジネスはその周辺を多くのグループ会社や協力会社が支えている裾野の広いビジネスです。人材育成面においてもグループ全体で新たな創意や工夫を重ね、オープンで活力のある魅力的なグループを作ることを目指しています。これは、この富山の地に本拠をおくJFEマテリアルについても全く同様であり、このような取り組みが新たな素晴らしい人材の採用につながる、というサイクルを生み出すことが出来ればと考えています。

社名：JFE ホールディングス株式会社
住所：〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-1-2
URL：<http://www.jfe-holdings.co.jp>
社名の由来：Jは日本（Japan）、Fは鉄の元素記号（Fe）、Eはエンジニアリング（Engineering）を意味し、鉄鋼とエンジニアリングをコア事業とした未来志向の企業グループ（Japan Future Enterprise）であることを表しています。
新住所：〒100-6527 東京都千代田区丸の内1-5-1
(4/16～) 新丸の内ビルディング27階

平成19年度 富山県教育記念館展示スケジュール (1階多目的ギャラリー)

【特別展】

- 自然に育まれたとやまの教育 4月21日(土)～6月1日(金)

【恒例展】

- 第26回富山県版造形教育作品展 6月9日(土)～7月8日(日)
- マセマティカル・ワールド展 7月15日(日)～9月9日(日)
- 第4回子どもの目、自然不思議発見写真展 9月24日(月)～10月14日(日)
- 第23回富山県教職員厚生会退職厚生部富山支部会員作品展 10月19日(金)～10月28日(日)
- 第25回みんながんばってます作品展 11月4日(日)～11月18日(日)
- 第19回富山県造形教育作品展 11月24日(土)～12月9日(日)
- アイディア・ロボット・フェスタ 12月15日(土)～1月27日(日)
- 第18回富山県中学校美術展 2月9日(土)～2月25日(月)
- 富山大学学生卒業記念書展 2月29日(金)～3月9日(日)

賛助会員の募集!

富山県ひとづくり財団では、広く財団の目的に賛同される個人、法人の方々に賛助会員としてご協力をいただきたいと考えております。多くの皆様のご賛同をお願いいたします。

◆年会費

法人会員 年一口 30,000円
個人会員 年一口 3,000円

◆特典

機関誌の定期配布(年2回)
セミナー、イベント等の開催案内
各種報告書等の配布
県の情報誌、冊子等の配布

◆申込方法

賛助会員入会ご希望の方は財団へ連絡をお願いします。所定の用紙をお送りいたします。



財団法人富山県ひとづくり財団

〒930-0018 富山市千歳町1-5-1 富山県教育記念館2階
 TEL(076)444-2000 FAX(076)444-2001
 e-mail:toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
 平成19年3月発行